

Hospital & Clinic

手稲溪仁会

小児重症患者対応

エクモ搭載専用搬送車を導入

手稲区の手稲溪仁会病院(田中繁道理事長、古田康院長・670床)は、運用する救急車4台のうち1台を更新、小児重症患者の搬送も対応可能な専用搬送車を導入し、運用を開始した。また、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う感染患者の安全な搬送も重要な課題であり、これまでエクモを搭載しての救急搬送は車内の広さから小児に限定していたが、成人に対しても搬送が可能となった。

これまでの経験を生かす、車内各所を独自改修した特別車で、エクモ装着患者の搬送も安全にできるほか、医師が処置し

おおよび車椅子の搬送が可能。小児重症症例の搬送チームを結成。全道を対象に小児専用救急搬送車両を導入。エクモ装着を安定し

2018年からは小児集中治療科の医師が中心となり、ICUや病棟看護師、臨床工学技士らで

ドクターヘリとも連携しており、救急搬送件数は年間20件を超え、道北や道東地域からも患者を

受け入れている。

今回導入した車両は、ハイエースを元に、屋根部分をかさ上げして、車内高を高くしたことで、スタッフが立った姿勢で処置が可能となった。ストレッチャーは、エクモを搭載できるタイプを採用。エクモ装置を安定し

た形で積むことができ、安全性が増した。また、ストレッチャーに合わせ、車内への昇降装置も特注した。

従来よりも横幅に余裕ができ、ストレッチャーの左右から処置が可能に。さらにストレッチャーの頭の部分に座席を設けたことで、座ったまま多くの処置ができる。車内側面には複数の棚を設けたほか、サイドレールも設置し、医療機器等を自在に設置できるなど使い勝手が良い。

車内が広くなったことで、看護師や臨床工学技士も作業しやすいほか、運転席とはガラス窓で隔

てることができ、感染症患者の搬送にも対応している。

小児重症患者の搬送は、「できる限り地元で治療したい」などの思いから、そのまま十分な治療ができずに亡くなる、搬送が遅れてしまうなどのケースもある。同病院では、今回の搬送車両の更新を機に、多くの医療者や患者の家族にも救命センターを知ってもらいたいとしている。

